様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４９１

研究課題名（和文）山田孝雄を中心とする近代日本語学確立期の多面的研究

研究課題名（英文）Multifaceted Investigation with a Focus on Yamada Yoshio in the Establishment Period of the Modern Japanese Linguistics

研究代表者
齋藤　倫明（SAITO, MICHIAKI）

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：２０１７８５１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　山田孝雄は、近代日本語学確立期において巨大な存在であるが、山田以前において、山田に影響を与えた研究・研究者、山田以後、山田の業績を受け継ぎ発展させた研究・研究者は多い。それらのうち、地理的に山田の「周辺」で活躍した研究者、および、当時の日本語学界から見て「周辺」に位置付けられる研究者、具体的には、安藤正次・菊沢季生・岡沢鉦治を取り上げて、山田の研究との関わりを探った。
　具体的には、戦前の台湾で古代日本語の文法研究を行なった安藤正次の事績調査に台湾に赴いた。また菊沢の提唱した日本語学史上重要な語彙論的概念「位相」と山田文法との関わり、岡沢の言語学的な文法理解と山田文法との関わりを探った。

研究成果の概要（英文）：Yamada Yoshio is an immensely figure in the establishment period of the modern Japanese Linguistics. But before Yamada there were many researchers who affected his studies, and after Yamada there were many researchers who inherited his studies. Among them we took up three persons, i.e., Ando Masatsugu, Kikuzawa Sueo, Okazawa Shoji and studied their relation to Yamada. They were active in Yamada's "peripheral" in terms of physical geography or were active in "peripheral" in terms of Japanese Linguistic circle of those days.
 Specifically, we went to Taiwan to investigate Ando Masatsugu's achievement because in prewar Taiwan he studied ancient Japanese grammar in relation to Yamada Grammar. Further we investigated the relation between Yamada Grammar and the lexicological important concept "Isou"(phase) Kikuzawa proposed, or between Yamada Grammar and Okazawa's linguistic approaches to the Japanese grammar.

研究分野：日本語語彙・文法に関する構造・歴史

キーワード：近代日本語学史　山田孝雄　安藤正次　岡沢鉦治　菊沢季生　周辺

１．研究開始当初の背景

近代日本語学確立期（大正期・昭和前期）の具体的様相に関しては、数多くの研究がなされてきたが、その多くは、山田孝雄（1875－1958）・松下大三郎（1878－1935）・三矢重松（1871－1923）といった著名な研究者とその業績を中心とするものであった。また、分野も文法論が専らであった。しかし、そういった中心的な研究や研究者を生み出す背景となった研究・研究者、あるいはそれらの研究者の業績を受け継いだ研究・研究者の詳細に関する調査・考察は必ずしも充分には行なわれていなかった。

２．研究の目的

上記の研究状況を背景とし、本研究では、近代日本語学確立期を代表する研究者の一人である山田孝雄を軸とし、時代的に山田と同時代、あるいはその前後、また地理的にも山田の近辺において活躍した研究者の研究を取り上げ、特に山田の主要な業績である文法論（「山田文法」と呼ばれる）の考え方との影響関係について考察する。その際、必ずしも文法論的な業績ばかりでなく、語彙論・日本語史・言語学等、他分野の研究にも幅広く目を向け、山田文法との直接的・間接的な関わりについて考究する。

３．研究の方法

(1)「中心と周辺」という対立概念を一つの軸として研究を展開する。具体的には、「中心」として、山田孝雄を据え、「周辺」として、まず山田が在職（1925－1933）した東北帝国大学のある仙台の地理的周辺において活躍した二人の研究者、菊沢季生（1900－1985）と岡沢鉦治（1870－1944）を取り上げる。菊沢は三重県の出身であるが、東北大学工学部を卒業後、法文学部に入り直し、卒業後に宮城学院女子大学教授（1949－1963）となる。岡沢は、長野県の出身であるが、1899－1938年まで仙台の第二高等学校教授を務める。

(2)時代や地域というよりも勢力圏の面から見て、山田が活躍した時代の日本語学界の「周辺」部において活躍した研究者として、安藤正次（1878－1952）を取り上げる。安藤は、戦前において日本が領有した台湾で、台湾大学文政学部教授（1928－1940）・総長（1941－1945）を務めた。安藤は、当時の日本語学界の「周辺」において日本語史（特に古代語）を研究した異色の研究者であり、山田の『奈良朝文法史』（1913）にも言及している。

(3)「多面的アプローチ」という点をもう一つの軸とする。山田の研究業績は広範に亘るが、その中心は、世に「山田文法」と言われる文法論にある。しかし、本研究では、文法論はもちろんのこと、さらに語彙論・日本語史・言語学といった「多面的な」観点から山田とその「周辺」の研究者との関わり合いを追究する。

(4)具体的には、上記 3 名の研究者に関し、菊沢については「位相」、岡沢については言語学、安藤については国語史、の観点から山田との関わりを考える。なお、菊沢の「位相」は、熱力学の用語に基づき著書『国語位相論』（1933）にて提示されたものであり、岡沢の主著は『言語学的日本文典』（1930・1932）という標題を有し、安藤の古代日本語に関する主著『古代日本語の研究』は 1924 年に刊行されている。

(5)以上からわかるように、本研究では、「近代日本語学の確立期」を、山田を「中心」の研究者、菊沢・岡沢・安藤を「周辺」の研究者として位置付け、両者を対比することを通して、その時期の多面的な様相を明らかにすることを目指している。

４．研究成果

基本的な点として、山田の研究活動の期間は長く、文法論に限っても、『日本文法論』（1908）から『日本文法学要論』（1950）に至るまで 40 年以上の長きに亘る点に注意しなければならない。従って、山田との関わりを考える際にも、どの時点にスポットライトを当てるかが問題となってくる。ただ、いわゆる「山田文法」の標準的なテキストとしては、通常、『日本文法学概論』（1936）が挙げられる。これは東北帝国大学での講義が基になったものである。

(1)菊沢と山田との関係について

①菊沢の提唱した「位相」の概念は、上記のように、熱力学の用語を借用したものであるが、これは、菊沢がもともと工学部出身であったということと関わりがあると思われる。

②菊沢が「位相」の概念を提出したのは、1933年であるから、山田で言えば、山田文法の成立期から確立期への移行期に当たる。

③菊沢は、言語の研究を、大きく「分析的」と「綜合的」とに二分し、いわゆる文法論は前者の中に、位相論は後者の中に位置付ける。これを現在の見方から言えば、文法論は言語の構造の研究であるのに対し、位相論は言語全体の在り方・使われ方の問題であるということになる。つまり、両者は言語の分析の観点・手法において根本的に異なるということである。

④そういう点で、菊沢の意識としては、位相論は山田文法のような文法論とは直接関わらないという考え方を取っていたと思われる。実際、菊沢に、位相論の立場からの文法論に対する直接的な言及は見られない。

⑤山田自身は、『日本文法講義』『日本口語法講義』（ともに 1922）において、いわゆる敬語を「句中に於ける語法の相関」「句の中での語法の相関」という形で文法事項として扱っていることを考えると、菊沢にそういった観点が見られない点は注目に値する。

(2)岡沢と山田との関係

①岡沢の『言語学的日本文典』は、上巻（1930）と中巻（1932）に分かれるが、本研究で問題

となるのは上巻である。時期的には、菊沢の「位相」概念の提出時期とほぼ重なり、山田文法の移行期に当たる。
②岡沢が「言語学的日本文典」と命名したのは、「言語学的立脚地に立ちて、思想本位に或る国語の現象を研究するもの」(6 頁）という意思に立ってのことである。ここには、本研究の対象である「近代日本語学確立期」特有の「思想の反映としての言語」という捉え方が見られる。その点は山田文法も同様であり、そこに両者の関連性も窺える。
③しかし、文法論立論の志向性としてより親近性が強いのは、山田文法よりも松下文法ではないかと思われる。上記の岡沢の言に関しては、松下文法の「一国語の文法は一般理論文法学の基礎の上に行なはれなければならない。」(『改選標準日本文法』1930：1）の言葉がすぐに思い起こされる。そういう点では、岡沢文法は、同じ時期の文法論としては、松下文法寄りと捉えることが出来よう。
④しかし、さらに岡沢文法の細部を見ると、松下・山田のどちらとも異なっていることがわかる。それは様々な点に見られるが、基本的な点としては、文法書の説明順序が文から語へと大きい単位から小さい単位へと向かっていること、助辞（助詞・助動詞）を語の一種と認めていること、の 2 点に現われている。
⑤岡沢文法は、この点からすると、むしろ橋本文法に近いと言えよう。そして、興味深いことに、岡沢文法の語と文との中間単位「文素」というのは、橋本の「文節」とほぼ同じ概念なのである。
⑥以上から、岡沢文法は、「言語学的」と銘打つことによって、山田文法からは遠ざかり、志向性としては松下文法、具体的な組織としては橋本文法に近付くことになったということがわかる。
(3)安藤と山田との関係
①安藤は、神宮皇學館から東京帝国大学文科大学言語学科に進み、上田万年(1867－1937）の指導を受けている。上田は日本の言語学・国語学の育ての親である。また、終戦によって台湾から帰国し、その後、東洋大学・昭和女子大学・法政大学教授、国語審議会会長等を歴任する。そういう意味では、安藤を「周辺」と位置付けうるのは、あくまでも台湾大学在職時代に限られる。
②安藤は、1928－1945 年の 17 年間を台湾で過ごすが、この時期は、山田文法の確立期から安定期に対応する。なお、山田は、その間（1940－1945)、神宮皇學館学長を務めているから、経歴の上でも両者の関連は深い。
③安藤の業績は多岐に亘るが、その中心の一つが古代語の研究、就中、いわゆる語構成（安藤の用語では「語詞構成」）の研究である。この時代、語構成を集中的に取り上げた点で、安藤は国語学史上に名を残すが、その主張は、安藤の著作としては早い時期に属する『古代国語の研究』（1924）に纏められている。
④上掲書「第五章　国語語詞の構成」において、山田の『奈良朝文法史』（1913）の説を高く評価しながらも自らは別の考えを提示している。その点では、山田と一線を画す。
⑤ただし、安藤の上掲書は、台湾渡航以前に刊行されたものである。台湾在職中にも、古代国語の「語詞構成」に関する重要な論文「四段活用動詞の構成について」(『台北帝国大学文性学部文学科研究年報　言語と文学』1、1938）が出されているが、ここでは山田には言及していない。
⑥以上のように考えると、安藤と山田との関係は、台湾渡航以前の古代語の研究に限った個別的なものであり、台湾滞在中（「周辺」の時代）には、特に山田文法との関係は強くなかったと言えよう。このことは、上記④における関わりも、山田文法の特質の一つである「複語尾」論に関連しながらも、個別的な語の問題として取り上げられており、文法論の問題としては論じられていない、という点からもわかる。
(4)以上、山田孝雄を「中心」に据え、菊沢季生・岡沢鉦治・安藤正次の 3 名を、地理的・勢力的「周辺」と位置付けて、両者の関連性を「多面的に」考察した。結論的には、「近代日本語学確立期」において、巨大な存在である山田の「周辺」に位置した研究者は、それぞれの立場から、山田と、言わば「付かず離れず」の独自の関わり合いを有していたとまとめることができよう。それは「近代日本語学確立期」であること、「周辺」であることの大きな特質であったと理解することができる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　9　件）

①斎藤倫明、複合字音語基相言類の位置づけをめぐって－漢語形容動詞語幹との関わりで－、日本語語彙へのアプローチ、査読無、2015、pp.11－26
②大木一夫、一回的文成立論と多段階的文成立論、輔仁大学日本語日本文学、査読有、43、2015、pp.99－119
③甲田直美、語りの達成における思考・発話の提示、社会言語科学、査読有、17－2、2015、pp.1－16
④斎藤倫明、複合字音語基用言類の下位分類－漢語動名詞との関わりで－、東北大学文学研究科研究年報、査読無、63、2014、pp.149－177
⑤斎藤倫明、複合字音語基の「兼用」について、文化、査読無、76－3・4、2014、pp.1－20
⑥甲田直美、語り内において連鎖する節の音響特徴：順番取りシステム再開位置との関連から、認知言語学論考、査読有、12、2014、pp.261－290

⑦斎藤倫明、拘束形式の複合字音語基の位置付けに関して－従来の複合字音語基分類との関わりで－、東北大学文学研究科研究年報、査読無、62、2013 、pp.107－139
⑧大木一夫、文に切る－文成立の外形的側面－、東北大学文学研究科研究年報、査読無、62、2013、pp.1－23
⑨大木一夫、不変化助動詞の本質、続貂、国語国文、査読有、81－9、2012、pp.1 －17

〔学会発表〕（計　3　件）
①大木一夫、一回的文成立論と多段階的文成立論、輔仁大学国際シンポジウム、2014 年 11 月 15 日、台北（台湾）
②甲田直美、語り内において連鎖する節の音響特性：順番取りシステム再開位置との関連から、言語科学会第 16 回年次国際大会、2014 年 6 月 28 日、文教大学（東京）
③斎藤倫明、漢語の分類を考える－複合字音語基分類再考－、第 147 回日本言語学会大会、2013 年 11 月 24 日、神戸市外国語大学（神戸）

〔図書〕（計　4　件）
①斎藤倫明、石井正彦、日本語語彙へのアプローチ－形態・統語・計量・歴史・対照－、おうふう、2015、313 頁
②小林隆、野田尚史、高山善行、くろしお出版、日本語の配慮表現の多様性－歴史的変化と地理的・社会的変異、2014、319 頁
③小林隆、ひつじ書房、柳田方言学の現代的意義－あいさつ表現と方言形成論－、2014、393 頁
④小林隆、澤村美幸、ものの言い方西東、岩波書店、2014、240 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
斎藤　倫明（SAITO, Michiaki）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：２０１７８５１０

(2)研究分担者
小林　隆（KOBAYASHI, Takashi）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：００１６１９９３

大木　一夫（OOKI, Kazuo）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：００２５０６４７

甲田　直美（Koda, Naomi）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：４０３０３７６３

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：